

大学教授のリクルートメントについて

——特に、社会学関係の教授を中心として——

星

明

一 リクルートメントの概念

どんな集団もその社会的機能を維持・存続させようとする限り、集団成員の補充が必要不可欠となる。そのばあい、補充の様式は集団外部からの新規補充 (recruitment) によるか、あるいは集団内部での引き継ぎ (succession)、地位転換 (status-passage) によるかの二つに大別できる。この小論であつかうリクルートメントとは、前者つまり当該集団が非成員を成員にすることである。② 個人の側からみるならば、ある個人がある集団 (集団 A) から他の集団 (集団 B) へかれの所属集団を変えることである。そのばあい、かれは供給集団 (feeder group) として以前所属していた集団 (集団 A) の成員の地位を、形式上失うと一応理解しておこう。③ しかし、かれが集団 A の前成員であつたという事実は、かれが集団 B にリクルートされるに際してなんらかのかかわりをもつかもしれない。この小論は集団 A と集団 B とのかかわりを、具体的には大学教授の出身大学と勤務大学との関係をリクルートメントを通して考察しようとするものである。

われわれは先にここでの論議がある集団が非成員を成員にするリクルートメントに限定すると述べてきた。それ

では、われわれが集団をどのような準拠枠でとらえるかを述べておこう。ここでは、一般に集団をもって境界づけられた諸関係の領域だという立場をとる。④ 集団は集団である限りこの境界を維持していかねばならない。森好夫教授は、この集団の境界は「集団を構成する『人間的素材』ともいえる成員」と「一定数の成員が相互に、また非成員に対して、多かれ少かれ型式化され規範化された行動」という二つの次元から成立していると述べている。⑤ 本論は、森教授のいう集団を構成する人間的素材である成員にかかわっている。この人間的素材である成員が構成する境界はいかにして維持されるかというところに、成員のリクルートメントの問題も生じてくるのである。

以上、集団の成員補充についての理論的な問題をみてきたが（註①）④も参照されたい、つぎに本題である大學教授のリクルートメントについての現実の問題に論議を移そう。

註

① 森好夫教授が述べているように、すべての集団が成員の補充をするとは限らない。「一定の限界内で成員が減少しても、それが集団の機能遂行を妨げないと考えられる場合には、補充しないこともあるし、また集団によっては、それへ成員を補充する源泉自体が消滅してしまつて、事実上補充のきかないこともある。例えば、母校が解散した後の同窓会のように」（森好夫、一九七二、『文化と社会的役割』、恒星社厚生閣、一六二頁）。集団はその社会的機能を遂行するためにマイナスの補充を行なうこともあるが（例えば企業の規模縮小による人員整理など）、ここでは一応考察の外におくことにする。しかし、

ここでいうマイナスの補充とはその集団の規範に照して逸脱行動をとるものを排除する意味ではない。

② 一口に成員といっても、新規補充されたものが直ちに成員性 (membership) をもつものではなく、当該集団の古参者によつて社会化されてはじめて名目的な成員から実質的な成員となるのである。すべての古参者がイコール実質的な成員であるというわけではないが、この小論では「実質的な成員」と「名目的な成員」との区別をするものではない。また非成員についても成員となることを望んでいるもの、成員となることに無関心のもの、成員となることを拒否するものの三つに、さらに有資格

の非成員と無資格の非成員の二つに分けられ、それぞれを組み合わせると六組の局面ができる。

集団所属に対する非成員の態度		適格者	不適格者
所属を熱望する	成員候補者	境界人	
加入には無関心である	潜在的成員	疎遠な非成員	
別に所属しようとする気もない	自律的非成員	敵対的非成員 (外集団)	

マートンは非成員の集団規定的な適格的地位と非成員の集団所属に対する自己規定的な態度とを組み合わせ、非成員の類型化を行なった。われわれが対象としているのは、マートンの図式からみるならば、所属を熱望する成員候補者ということになる。少くとも潜在的にそういう態度をもつものをあつかうことになる。また、成員補充を集団の側からみるばあい、各個人がある集団への加入の熱意において相違しているように、各集団はその成員の増減に対する関心の相違、つまり集団が相対的に開放的であるか封鎖的であるかによって、非成員の補充に影響を及ぼすことは言うまでもない(R・K・マートン、1949 (rev. & enl. edition 1957), *Social Theory and Social Structure*, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳、一九六一、『社会理論と社会構造』、みすず書

房、二六三—二七一頁)。

③ 個人の所属集団は、通例、複数であって、このばあいも必ずしも集団Aのメンバーシップを失うとはいえない。また、形式上、メンバーシップを失ったとしてもかれの行為や動機づけの中に準拠集団として集団Aの影響があるかもしれない。マートンは、非成員の範疇を以前その集団の成員であつた者とそうでなかった者とに区別して、その経歴を参照して、動的に概念化する必要を説いている(マートン、訳、二六七—三七二頁)。

④ この立場はS・F・ネーデル、1957, *The Theory of Social Structure*, 斎藤吉雄訳、一九七八、『社会構造の理論』恒星社厚生閣、二八—三六頁。T・パソンズ、E・A・シルズ編、一九五一、*Toward a General Theory of Action*, 永井道夫・作田啓一・橋本真共訳、一九六〇、『行為の総合理論をめざして』、日本評論社、やT・パソンズ、1951, *The Social System*, 佐藤勉訳、一九七四、『社会体系論』の中の社会体系や集合体の規定をみよ。なお、集合体の境界と成員についてパソンズらは「境界 (boundary) の概念は、集合体を定義するにあたつて、きわめて重要な意義をもっている。集合体の境界とは、ある人は成員として包含し、他の人は成員ではないとして除外する基準である。ある一人の人を包含するか除外するかは、その人が集合体の中に成

員としての役割 (membership role) をもっているか否かによる。だからこのような役割をもっている人はすべて成員であり、その境界の内側にある。そこで、境界は成員としての役割という見地から定義されるのである」

(パーソンズ他編、永井他共訳、前掲書、三〇三—四頁)。本論においても、集団の成員とはある集団内にいて地位と役割をもつものとしてあつかっている。

⑤ 森好夫、前掲書、一六三—五頁。

二 社会学関係の教授の出身大学と勤務大学

集団が相対的に開放的であるか封鎖的であるかによって、非成員の補充が左右されるということを先で少し触れた。T・キャプローとR・J・マッギーは、集団の開放性および封鎖性をリクルートメントの区別に採用している。前者は「開放的」ないし競争的雇用 (“open,” or competitive, hiring) であり、後者は「封鎖的」ないし特惠的雇用 (“closed,” or preferential, hiring) である。キャプローらは、一九五六—七年頃の研究において、理論では学者のリクルートメントは大抵開放的であるけれども、実際には大抵封鎖的であると述べている。また、一八八五—一九三七年の間のインディアナ大学における内集団成員と任命との関係を調査したA・B・ホーリングズシェッドは、全任命数八〇二の中で卒業生三四四、家族的つながり (family ties) のあるもの一六四の任命数を報告している。^⑦

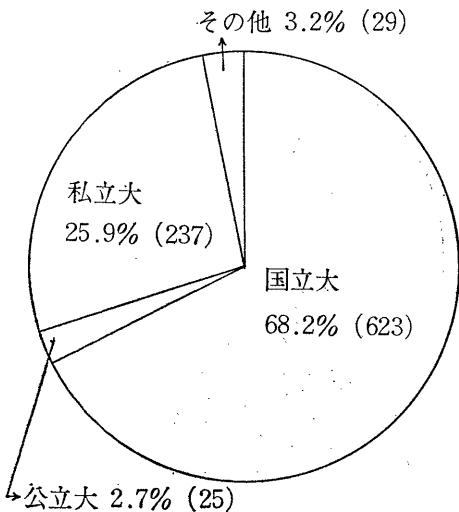
わが国における大学教授のリクルートメントに関する調査・研究は、新堀通也教授によって精力的になされている。^⑧ また、アメリカの社会学者による日本の大学市場の研究もある。A・ウィルソンは大学教授の地位は多くの変数の結果であり、一流の専門家としての大学教授には強い必要条件が課せられるという。^⑩ またP・M・ブラウは、大学の質と大学の社会や知識への貢献は大学教授の質によっているといっている。^⑪ かれらの指摘を取り入れて、日

本の大学教授のリクルートメントを分析する必要もあろう。

さて、論議を本筋に戻そう。われわれの目的は大学教授の出身大学と勤務大学との間にどのような関係があるかをみることであった。現在、わが国には約六二、〇〇〇人の専任講師以上の職階にある大学教員がいる。ここで、かれらの中から社会学関係の講義を担当している大学教授九一四名の出身大学と勤務大学との関係をみてみよう。その前に、まず「設置者別教授産出数」(第一図)、「設置者別教授数」(第二図)、「大学別教授産出数」(第三図)を概観しておこう。

第1図 設置者別教授産出数

——パーセントと(実数)——

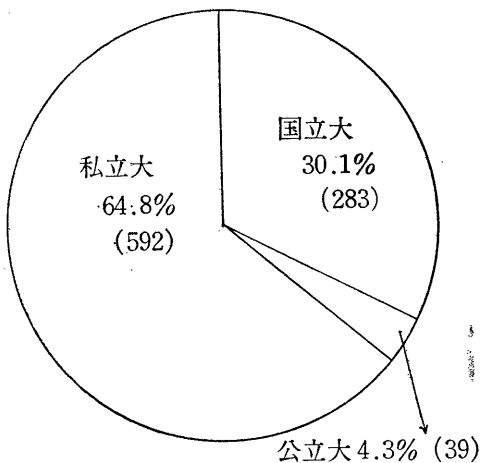


注) その他は大学以外の学校および外国の大学出身者である。昭和53年6月現在。以下同じ。

資料) 『大学職員録』(昭和54年度版), 広潤社, 1979。以下全図表とも同じ。

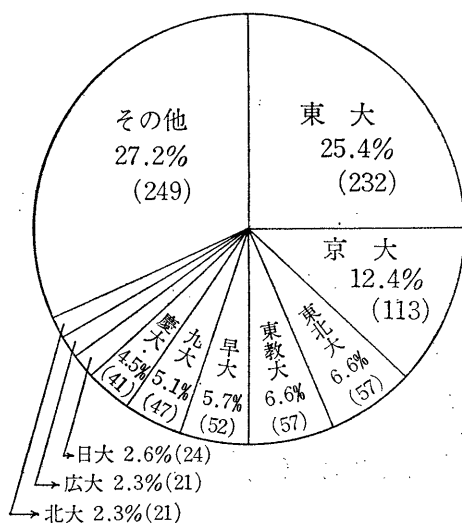
第2図 設置者別教授数

——パーセントと(実数)——



第3圖 大學別教授產出数

——パーセントと(実数)——



ーセント、五九二名が私立大に、三〇パーセント、二八三名が国立大に、残りの四パーセント、三九名が公立大に勤務している。第三図はどの大学が教授を多く産出しているかをみたものである。この図も一見して分かるように東京大は二五パーセント、二三二名を占め、大学教授の四分の一は東京大の出身者である。その約二分の一の二一パーセント、一一三名が京都大の出身者である。以下、順に東北大、東教大はそれぞれ六・六パーセント、五七名、早稲田大五・七パーセント、五二名、九州大五・一パーセント、四七名、慶応大四・五パーセント、四一名、日本大二・六パーセント、二四名、広島大二・三パーセント、二一名、北海道大二・三パーセント、二一名となり、以

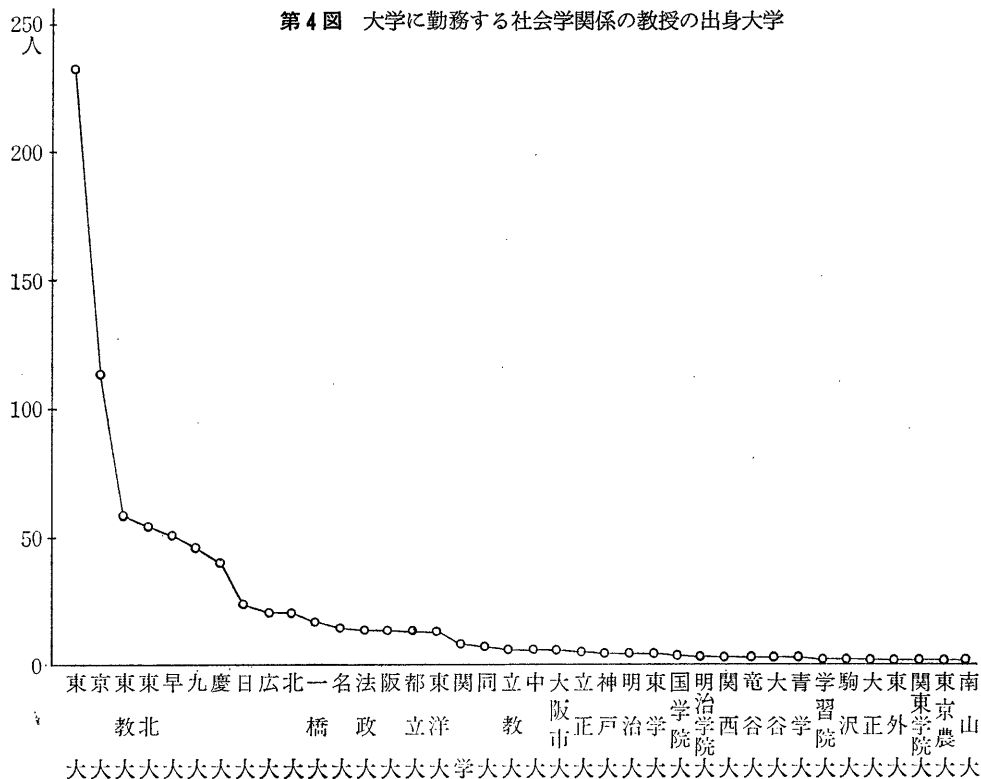
第一図は大学教授の出身大学を国立・公立・私立の別によって分類したものである。一見して分かるように九一四名の六八パーセント、六二三名が国立大学出身者であり、二六パーセント、二三七名が私立大学出身者である。二・七パーセント、二五名が公立大学出身者である。第二図は大学教授の勤務大学を国立、公立、私立の別によって分類したものである。第一図と第二図とでは、国立大と私立大の割合が丁度逆になっている。つまり、国立大は養成した大学教授六二三名のうちほぼ半数を国立大に残し、残りの半分を私立大に輸出している。比喩的に言うならば、輸出超過である。第二図も一見して分かるように九一四名の六五パ

上一〇大学の出身者が全教授の約七割を占めている。第一から三図までの社会学関係の教授九一四名を三つの側面から概観してきたわけであるが国立大出身者の高い比率六八パーセント、私立大勤務者の高い比率六五パーセント、国立大出身者の私立大学への輸入超過、東京大および京都大出身者の高い比率がみられる。第四図から第七図までは大学全体および設置者別にみた大学に勤務する教授の出身大学をみたものである。

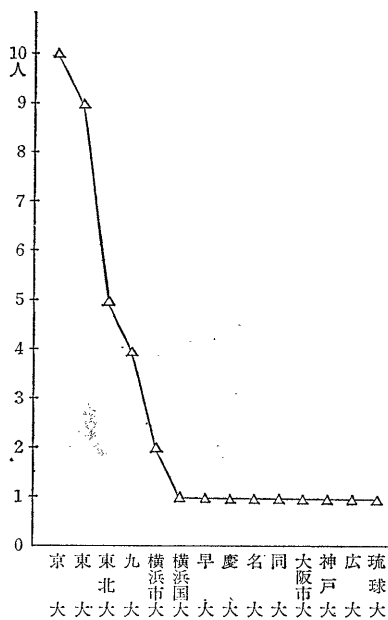
第四図から第七図までの内訳をあらわしたのが第一表「出身大学別および勤務大学設置者別による社会学関係の教授」である。例えば、東京大の出身者二三二名は国立大に八九名、公立大に九名、私立大に一三四名勤務していることをあらわしている。先に国立大は養成した大学教授のうち約半数を私立大に送り込んでいるということを指摘したが、そのことは第一表においてより詳細にみられよう。例えば、東京大、京都大、東京教育大、東北大、九州大、北海道大、一橋大、名古屋大などである。それに対して、私立大出身者の殆んどすべては私立大に勤務していることが分かる。例えば、早稲大、慶応大、日本大、法政大、東洋大、関西学院大、同志社大、立教大、中央大、立正大、明治大、明治学院大などである。一方、公立大の出身者は約八割が私立大に勤務している。

第四図から第七図および第一表から看取されうるのは、国立大および公立大の出身者は相対的に容易に私立大の教授としてリクルートメントされるが、逆に私立大の出身者が国立大や公立大の教授としてリクルートメントされることは極めて少ないということである。また、公立大の出身者も国立大の教授にリクルートメントされることは少ない。数字の上からみる限りにおいては、国立大は私立大出身者および公立大出身者にとって、キャプロー・マッギーのいう封鎖的雇用になるし、逆に私立大は国立大出身者および公立大出身者にとって開放的雇用になっている。国立大の国立大出身者に対する特惠的処遇 (preferential treatment) つまり身内びいき^⑩ (nepotism) の傾向、飽くまでも傾向であるが、を指摘できよう。少なくとも数字の上では。しかし、それを実証するには、任命の

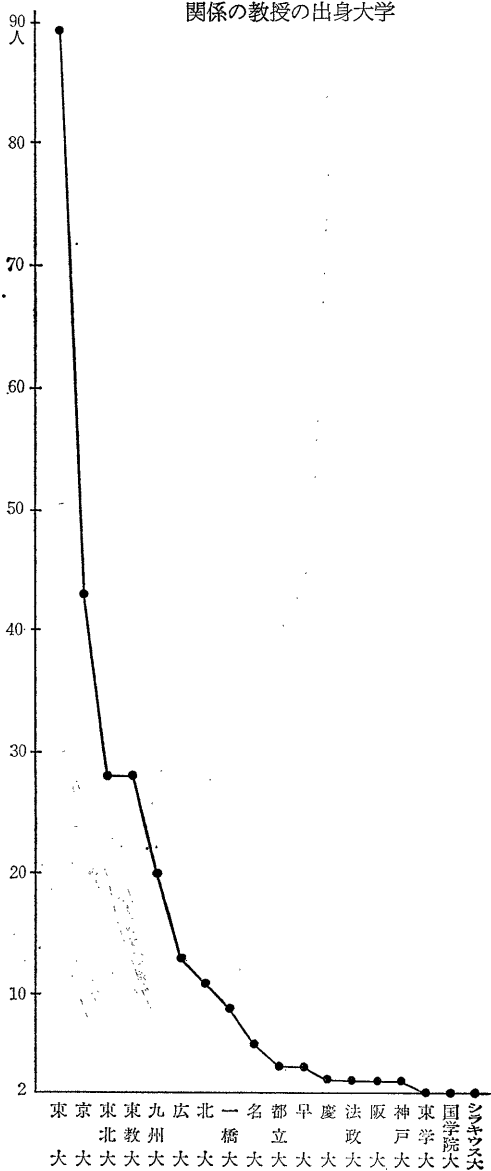
第4図 大学に勤務する社会学関係の教授の出身大学



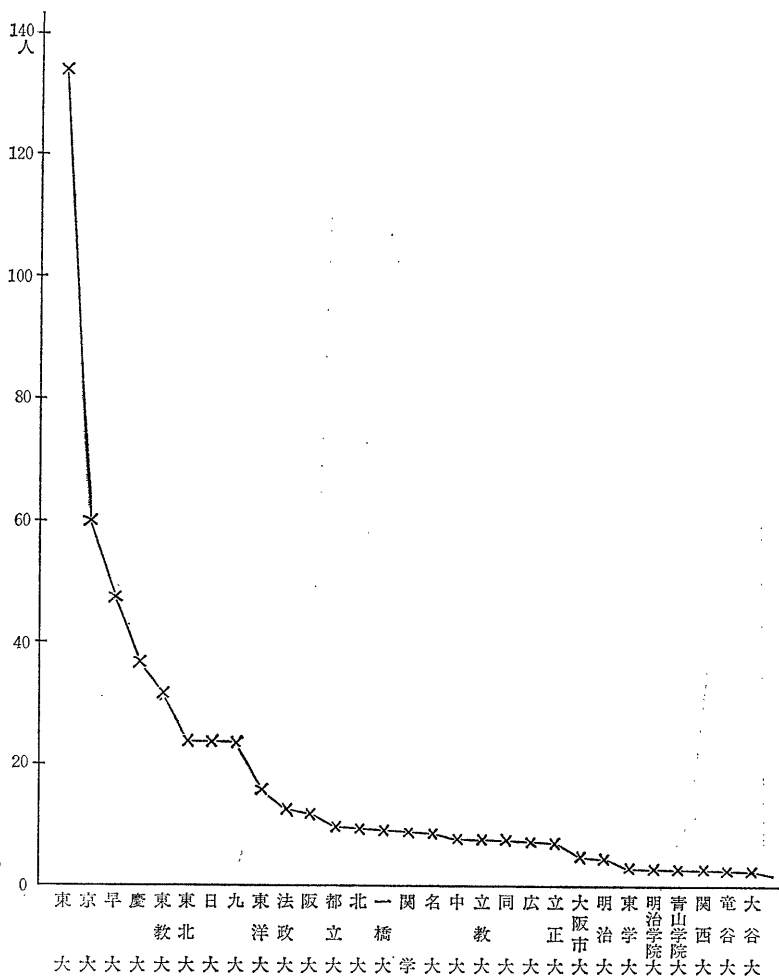
第6図 公立大学に勤務する社会学関係の教授の出身大学



第5図 国立大学に勤務する社会学関係の教授の出身大学



第7図 私立大学に勤務する社会学関係の教授の出身大学



第1表 出身大学別・勤務大学設置者別社会学関係の教授

勤務大学設置者別 出身大学			計	国 立	公 立	私 立
1.	東 大	大	232	89	9	134
2.	京 大	大	113	43	10	60
3.	東 大	大	60	28	0	32
4.	東 大	大	57	28	5	24
5.	早 大	大	52	4	1	47
6.	九 大	大	47	20	4	23
7.	慶 大	大	41	3	1	37
8.	日 大	大	24	0	0	24
9.	広 大	大	21	13	1	7
10.	北 大	大	21	11	0	10
11.	一 橋 大	大	19	9	0	10
12.	名 大	大	16	6	1	9
13.	法 政 大	大	16	3	0	13
14.	阪 大	大	15	3	0	12
15.	都 立 大	大	15	4	0	11
16.	東 洋 大	大	15	0	0	15
17.	関 大	大	10	0	0	10
18.	同 大	大	9	0	1	8
19.	立 教 大	大	8	0	0	8
20.	中 大	大	8	0	0	8
21.	大 阪 市 大	大	7	1	1	5
22.	立 正 大	大	7	0	0	7
23.	神 戸 大	大	6	3	1	2
24.	明 治 大	大	5	0	0	5
25.	東 学 大	大	5	2	0	3
26.	国 学 院 大	大	4	2	0	2
27.	明 治 学 院 大	大	3	0	0	3
28.	関 大	大	3	0	0	3
29.	竜 谷 大	大	3	0	0	3
30.	大 谷 大	大	3	0	0	3
31.	青 学 大	大	3	0	0	3
	そ の 他		66	11	4	51
計			914	283	39	592

大学教授のリクルートメントについて

プロセスをより詳細に分析しなければならない。

これまでは、単に出身大学と勤務大学との関係を大雑把に述べてきたに過ぎないが、つぎに個々の出身大学と個の勤務大学との関係をみることにしよう。国立大に勤務する教授の各出身大学（第二表）、公立大に勤務する教授の各出身大学（第三表）、私立大に勤務する教授の各出身大学（第四の a~f 表）である。

第二表は先の第五図をより詳細にみたものである。一見して分かることは勤務大学数七〇に対して供給集団としての出身大学の数は二八、海外の大学を除外するならば、二三である。このことは、比喩的な表現を用いれば国立大は教授のリクルートメントに関して指定校制度を採っているともいえよう。先に触れた集団 A から集団 B へのリクルートメントではなく、集団 A から集団 A へのリクルートメントもいくつかの大学でみられる。いわゆる *inbreeding* である。例えば、東北大、筑波大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、広島大、九州大などは自校出身者の割合が五〇パーセント以上である。また、出身大学と勤務大学との間の地理的距離がリクルートメントに際して影響をもっているばあいもみられる。例えば、京都大とその近隣の大学との間、九州大とその近隣の大学との間、九州大とその他の大学の間の関係にみられる。

第三表は先の第六図をより詳細にみたものである。公立大に勤務する教授のばあいのみ供給集団の一位が一名の差に過ぎないが、東京大から京都大へ入れ代る。その他出身大学数一四のうち三、勤務者数三九のうち三が私立大および私立大出身者であることを除いて著しい傾向はないようである。つぎに第四表の各表を見ていただきたい。第四表（a~f）は先の第七図をより詳細にみたものであるが、勤務大学数一八七に対して出身大学数は五六である。出身大学数五六の内訳は、国立大二一、公立大三、私立大三二である。他の大学は社会学の専攻をもっていないなどの理由によって、社会学関係の教授を養成していない。便宜的に勤務大学を北海道・東北、関東、中部、

第3表 公立大学に勤務する教授の出身大学

大学教授のリクルートメントについて

出身大学 勤務大学	東北大	東大	横浜国大	横浜市大	早大	慶大	名大	京大	同大	大阪市大	神戸大	広大	九大	琉球大	計	%
福島医大	2														2	5.1
高崎経大		1													1	2.6
都立大		4	1												5	12.8
横浜市大		1		2	1			1			1				6	15.4
岐阜薬大								1							1	2.6
静岡女大	1														1	2.6
静岡薬大		2													2	5.1
愛知県大								1		1					2	5.1
名古屋市大							1								1	2.6
京都府大								1							1	2.6
大阪女大								2							2	5.1
大阪市大	1	1						3					1	1	7	17.9
大阪府大								1							1	2.6
神外大						1								不明 (1)	1 (1)	2.6
広島女大	1														1	2.6
山口女大												1	2		3	7.7
高知女大									1						1	2.6
北九州大													1		1	2.6
計	5	9	1	2	1	1	1	10	1	1	1	1	4	1	39	
%	12.8	23.1	2.6	5.1	2.6	2.6	2.6	25.6	2.6	2.6	2.6	2.6	10.3	2.6		100.0

[illegible]

第2表 国立大学に勤務する教授の出身大学

出身大学 勤務大学	北大	東北大	東大	東教大	一橋大	東学大	都立大	群馬大	静岡大	早大	慶大	法政大	国基大	国学院大	駒沢大	名大	京大	阪大	大阪市大	神戸大	岡山大	広島大	九大	海外の大学	計	%
1 北大	5		3	1		1																			10	3.5
2 北教大	1	1	1																			1			4	1.4
3 小樽商大											1														1	
4 帯広畜大	1		1																						2	
5 旭川医大	1																								1	
6 弘前大			2																						2	
7 岩手大		1																							1	
8 東北大		8																							8	2.8
9 宮城教大		1																							1	
10 秋田大					1																				1	
11 山形大		2		1																					3	
12 福島大			2		2																				4	1.4
13 茨城大		1	4	1								1					1								8	2.8
14 筑波大	1	1	5	7			1																		15	5.3
15 宇都宮大			1	1																					2	
16 群馬大			1	1						2															4	1.4
17 埼玉大			3	1																					4	1.4
18 千葉大			5	2			1										1								9	3.2
19 東大			13														1								14	4.9
20 東医歯大			2																						2	
21 東外大		1																							1	
22 東学大		1	5	2																			1		9	3.2
23 東農工大			1																						1	
24 お茶の水			4				1						1												6	2.1
25 電通大			1																						1	
26 一橋大				1	5																				6	2.1
27 横浜国大			2				1							1								1			5	1.8
28 新潟大		1		1													1								3	
29 富山大								1									2			1		1			5	1.8
30 金沢大		2	2																				1		5	1.8
31 福井大			1														1								2	
32 山梨大		1	1	1		1																			4	1.4
33 信州大				2					1																3	
34 岐阜大		1																						1	2	
35 静岡大	1			1	1																				3	
36 名古屋大			2													2									4	1.4
37 愛知教大		1									1						1								3	
38 名工大			1																						1	
39 三重大		1																							1	
40 滋賀大																	1				1				2	
41 滋賀医大																	1								1	
42 京大			1														5								6	2.1
43 京教大				1													1								2	
44 京工繊大																	1								1	
45 阪大			9													1	5			1			1		17	6.0
46 大外大																	1								1	
47 大教大			1														3					1			5	1.8
48 神戸大		1	3							1							2	1							8	2.8
49 奈良教大			1	1													1		1						4	1.4
50 奈良女大			1														2	1							4	1.4
51 和歌山大			1														2	1							4	1.4
52 鳥取大			1								1														2	
53 島根大														1								1			2	
54 岡山大			1		1																		1		3	
55 広島大		1	2																			4			7	2.5
56 山口大		1															1						3		5	1.8
57 徳島大																	1			1					3	
58 香川大			1														2								3	
59 愛媛大															1	1						1			3	
60 高知大											1											1			2	
61 福岡教大																	2						1		3	
62 九大		1	1																				4		6	2.1
63 佐賀大																(1)							2		2	
64 長崎大															1	1									2	
65 熊本大			1														2						1		4	1.4
66 大分大			2																			1	1		4	1.4
67 宮崎大				1																			1		2	
68 宮崎医大	1																								1	
69 鹿児島大												1											3		4	1.4
70 琉球大				1						1					1	1								5	9	3.2
計	11	28	89	28	9	2	4	1	1	4	3	3	1	2	1	6	43	3	1	3	1	13	20	6	283	
%	3.9	9.9	31.4	9.9	3.2		1.4			1.4					2.1	15.2						4.6	7.1		100.0	

第4のb表 私立大学に勤務する教授の出身大学（関東）

出身大学 勤務大学	東大	早大	慶大	東教大	東北大	東洋大	日本大	中大	法政大	立教大	立正大	京大	都立大	東外大	国学院	明治学院大	明治大	青学大	東学大	関西学大	東芸大	大正大	神戸外大	一橋大	学習院大	九大	順天堂大	日本女子大	北大	東農大	上智大	南山大	同大	名大	関東学院大	成蹊大	駒沢大	横浜経専	神奈川師範	東海大	海外の大学	計	%		
	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大			大	
17 茨城キ大																																										1	1	0.3	
18 流通経大									1																																		1	0.3	
19 自治医大		1		1																																							2	0.6	
20 関東学大											1																																1	0.3	
21 跡見学女		1																																									1	0.3	
22 国際商大	4				1									1																													6	1.7	
23 城西大	1																																										1	0.3	
24 城西岡大													1																														1	0.3	
25 独協大		1														1																											2	0.6	
26 文教大	1	2	2															1	1	1																							8	2.3	
27 淑徳大						1				1												1																					3	0.9	
28 千葉工大	1																																										1	0.3	
29 千葉商大						1																																					1	0.3	
30 中央学大	1																																										1	0.3	
31 麗沢大					1																																						1	0.3	
32 青学大		1														1							1																				3	0.9	
33 亜細亜大	1					1		1																1																			4	1.2	
34 大妻女大				1			1					1																															3	0.9	
35 桜美林大		1																																									1	0.3	
36 学習院大	1						1																	1																			3	0.9	
37 共立薬大	3																																										3	0.9	
38 慶大	1		18																																					1	20	5.8			
39 国学院大	1														1																												2	0.6	
40 国基大																																										1	1	0.3	
41 国士館大		1		1																																							2	0.6	
42 駒沢大	2	1	1	1					1								1									1																		8	2.3
43 実践女大																									1																			1	0.3
44 芝浦工大		2																																										2	0.6
45 順天堂大					1		1																				1																	3	0.9
46 上智大	4				1						1																																6	12	3.5
47 昭和大	2																																										2	0.6	
48 昭和女大	1																																										1	0.3	
49 成蹊大	4	1							1	1				1																													8	2.3	
50 成城大					1																																							1	0.3
51 聖心女大					1																																							1	0.3
52 聖路加看																																										1	1	0.3	
53 専修大		1					1		1																			1															1	5	1.4
54 創価大	7		2		1							1	2																														13	3.8	
55 大正大	2			1																																								3	0.9
56 大東文大	1										1																																	2	0.6
57 高千穂商	1																																											1	0.3
58 拓殖大	1																																											1	0.3
59 玉川大					1																																							1	0.3
60 中央大	6	1			2			1				1																																11	3.2
61 津田塾大	3																																											3	0.9
62 帝京大	1						1																																					2	0.6
63 東海大		2	3	1		1																																					1	8	2.3
64 東音大	1																							1																				2	0.6
65 東家政大	1					1																																						2	0.6
66 東経済大																								1																				1	0.3
67 東歯大			1																																									1	0.3
68 東京女大	2				1																								1														1	5	1.4
69 東造形大																		1																										1	0.3
70 東電機大	1	1																																										2	0.6
71 東農大	1																																											3	0.9
72 東邦大					1			1																																				2	0.6
73 東洋大	10			3	2	1				1			1																															20	5.8
74 日大	3		1				14	1																																					

第4のd表 私立大学に勤務する教授の出身大学（関西）

出身大学 勤務大学	慶大	京教大	京大	同大	広大	大阪市大	東教大	阪大	甲南大	中大	東大	東北大	都立大	北大	竜谷大	関大	神戸大	一橋大	関学	立命大	法政大	日大	明治大	奈良師範	同大	名大	九大	東工大	早大	海外の大学	計	%	
	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
121 大谷大			1												1																	2	1.7
122 京外大	1																															1	0.9
123 京学園大											1																					1	0.9
124 京女大																																0	0
125 京都薬大																																0	0
126 光華女大																																0	0
127 種智院大																																0	0
128 同大		1	2	1							1																					5	4.3
129 同女大				1																												1	0.9
130 花園大			1																													1	0.9
131 仏教大			3		1	1	1	2	1	1																						10	8.5
132 立命館大			5								4	1	1	1																		12	10.3
133 竜谷大			3												3	1																7	6.0
134 大阪医大																	1															1	0.9
135 大阪音大											1																					1	0.9
136 大阪学院			1																													1	0.9
137 大経大																			1													1	0.9
138 大経法大																				1												1	0.9
139 大阪芸大			1																													1	0.9
140 大阪産大								1																								1	0.9
141 大体育大							1																									1	0.9
142 追手門学			1					3			1							1	1		1											8	6.8
143 関西大			8													1																9	7.7
144 近畿大			2																			1	1									4	3.4
145 四天王寺			1																					1								2	1.7
146 帝国女大																										1						1	0.9
147 帝塚山学			1																													1	0.9
148 阪南大																											1					1	0.9
149 桃学大							1	2			2		1																			6	5.1
150 芦屋大																			1													1	0.9
151 英知大																														1		1	0.9
152 関学			2				1	1			2	1	1						1									4	1			14	12.0
153 甲南大			3					1																						1		5	4.3
154 甲南女大			4			1																										5	4.3
155 神戸学院			2																1													3	2.6
156 神女学院			1			1													1													3	2.6
157 天理大							1	1																								2	1.7
158 奈良大																													1			1	0.9
159 高野山大			1																						1							2	1.7
計	1	1	43	2	1	3	5	11	1	1	12	2	3	1	4	2	1	1	6	1	1	1	1	1	2	1	4	1	2	1	117		
%	0.9	0.9	36.8	1.7	0.9	2.6	4.3	9.4	0.9	0.9	10.3	1.7	2.6	0.9	2.6	1.7	0.9	0.9	5.1	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	1.7	0.9	3.4	0.9	1.7	0.9		100.0	

第4のc表 私立大学に勤務する教授の出身大学（中部）

出身大学 勤務大学	慶大	東大	東北大	早大	京教大	東洋大	日本大	同大	京大	法政大	名大	竜谷大	京城大	愛知大	関学大	阪大	神戸大	一橋大	海外の大学	計	%
100 新潟薬大		1																		1	2.5
101 金沢経大												1								1	2.5
102 北陸大									1											1	2.5
103 長野大		1	1																	2	5.0
104 岐阜経大		1																		1	2.5
105 岐阜女大									1											1	2.5
106 聖徳岐教		1																		1	2.5
107 愛知大	1			1									1	1	1					5	12.5
108 愛知学院				1	1			1	1											4	10.0
109 愛知淑徳				1																1	2.5
110 金城学院								1			3					1	1			6	15.0
111 大同工大																		1		1	2.5
112 中京大	2						1				1									4	10.0
113 中京女大										1										1	2.5
114 同朋大		1																		1	2.5
115 名音大		1																		1	2.5
116 名学院大		1																		1	2.5
117 名女子大											1									1	2.5
118 南山大	1																		1	2	5.0
119 日福大																				1	2.5
120 名城大			1			1			1											3	7.5
計	4	7	2	3	1	1	1	2	4	2	5	1	1	1	1	1	1	1	1	40	
%	10.0	17.5	5.0	7.5	2.5	2.5	2.5	5.0	10.0	5.0	12.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	100.0	

第4のe表 私立大学に勤務する教授の出身大学（中国・四国）

出身大学 勤務大学	京大	広大	大阪市大	東教大	東大	一橋大	関学	明治大	九大	大正大	立教大	東洋大	海外の大学	計	%
	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大		
160 岡山商大										1				1	4.0
161 岡山理大	1	1						1						3	12.0
162 ノートルダム清心女大								1						1	4.0
163 広島経大													1	1	4.0
164 広島工大		1												1	4.0
165 広島修道大	1		1						2					4	16.0
166 広島女学大									1					1	4.0
167 広島文教大	1	1												2	8.0
168 福山大					1									1	4.0
169 安田女子大		1												1	4.0
170 東亜大									1					1	4.0
171 四国学院大				1										1	4.0
172 松山商大				1		1	1		2		1	1		7	28.0
計	3	4	1	2	1	1	1	2	6	1	1	1	1	25	
%	12.0	16.0	4.0	8.0	4.0	4.0	4.0	8.0	24.0	4.0	4.0	4.0	4.0		100.0

関西、中国・四国、九州（沖縄を含む）の六地域に分けてみたがその地域のなかで支配的な供給集団としての大学が存在する。すなわち、北海道・東北（第四のa表）では北海道大・東北大、関東（第四のb表）では東京大・早稲田大・慶応大・日本大・東教大、中部（第四のc表）では東京大・名頃屋大、関西（第四のd表）では京都大・東京大・大阪大・関西学院大、中国・四国（第四のe表）では九州大・広島大、九州（第四のf表）では九州大である。これらは、第二表の国立大に勤務している教授の出身大学をみたときと同様に、出身大学と勤務大学との地理的距離がリクルートメントに影響しているとみることができよう。また、出身大学と勤務大学とが同一である（時にはそれはやや軽蔑的な意味で inbreeding といわれるが）教授の多い大学もある。例えば慶応大、日本大、早稲田

第4のf表 私立大学に勤務する教授の出身大学（九州・沖縄）

出身大学 勤務大学	京大	広大	東教大	中大	東大	東北大	関大	関学	九大	福岡教大	拓殖大	福岡大	海外の大学	計	%
173 九州共立大									1					1	4.0
174 九州産大		1												1	4.0
175 九州女子大	1													1	4.0
176 久留米工大										1				1	4.0
177 西南学院大									1				1	2	8.0
178 第一経大							1							1	4.0
179 中村学園大									1					1	4.0
180 福岡大大			1		(1)	1		1	4(1)					7	28.0
181 福岡工大				1										1	4.0
182 八幡大						1								1	4.0
183 西九州大									1					1	4.0
184 九州東海大					1									1	4.0
185 熊本商大									1					1	4.0
186 九州学院大											1	1		2	8.0
187 沖縄国際大									1				2	3	12.0
計	1	1	1	1	1(1)	2	1	1	10(1)	1	1	1	3	25	
%	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	8.0	4.0	4.0	40.0	4.0	4.0	4.0	12.0		100.0

大などである。いずれの大学も早い時期の創立であり、研究者養成機関としての大学院をもっている大学であることが inbreeding の傾向を生起する一要因である。

註

⑥ Caplow, Theodore and McGee, Reece J., 1958, (reprint edition 1977), *The Academic Marketplace*, Arno Press, pp. 109-12.

⑦ Hollingshead, A. B., 1938, *Ingroup Membership and Academic Selection*, ASR, Vol. 3, No. 6. ホーリングズヘッドは内集団の規準として三つの三つをあげている。(一) インディアナ大学で一つないしそれ以上の学位の完成に至たる訓練を受けたもの、(二) インディアナ大学と他の大学における人員間の既知の仲間関係にあるもの、(三) 教職員と非教職員との間に血族関係および婚姻関係のあるもの、すなわちこの三つである。かれは、これら三つの要因 (alumni appointments, friendships ties, family ties) が新任人事に

のように影響を及ぼしているかといふことを数字をあげて説明している。

- ⑧ 新堀通也、一九六五、『日本の大学教授市場』、東洋館出版社。同編著、一九六九、『学閥』、福村出版。同著、一九七八、『日本の学界』、日本経済新聞社。

- ⑨ Cummings, William K., 1972, *The Changing Academic Marketplace and University Reform in Japan*, 岩内亮一・友田泰正訳、一九七二、『日本の大学教授』、至誠堂。

- ⑩ Wilson, Logan, 1942 (reprint edition 1964), *The Academic Man : A Study in the Sociology of a Profession*, Octagon Press, p. 15.

- ⑪ Blau, Peter M., 1973, *The Organization of Academic Work*, A Wiley-Interscience Publication, pp.

三 総 括

以上、大学教授のリクルートメントの問題を社会学関係の教授の出身大学と勤務大学との関係を通してみてきたわけであるが、少なくとも数字を通してみる限りつぎのようなことが言えよう。

- 一、供給集団として国立大と私立大とを比較したばあい、リクルートメント数の比は約七対三である。
- 二、リクルートメントはいくつかの特定大学によって支配的になされている。——東京大二五%（二三二名）、京都大一二%（一一三名）、東北大七%（五七名）、東京教育大七%（五七名）、早稲田大六%（五二名）、九州

79-100.

- ⑫ キャプロー・マギーはある辞書の定義を採用して身内びいきを「功績よりもむしろ関係という理由による援護の授与」としている。かれらはリクルートメントの手づきにおける身内びいきあるいは封鎖的雇用の多様さについてつぎの七つをあげている。(一)母校の援助、(二)身を任せる人を知っていること、(三)ここで何某と言われる偉い人を知っていること、(四)あそこ出身の何某氏がここにいること、(五)ここ出身の何某氏があそこにいること、(六)かれがその場にいたこと(客員教授などとして研究をして)、(七)かれは以前からここにずっといたこと(学生やスタッフメンバーとして)。(Caplow and McGee, *op. cit.*, p. 100)

大五%（四七名）、慶応大五%（四一名）など——

三、リクルートメントは出身大学と勤務大学との地理的距離の遠近によって影響を受けている。

四、いくつかの大学においては、出身大学と同一の大学の教授として相対的に多くリクルートされている。——

国立大では北海道大・東北大・東京大・一橋大・名古屋大・京都大・広島大・九州大など、私立大では慶応大

・日本大・早稲田大・立正大など、公立大ではなし——

五、国立大の教授のほとんどすべては国立大出身者からリクルートされている。私立大出身者は約五%（一四名）である。

以上がこの小論で用いた統計資料から大学教授のリクルートメントに関して得られた、ある意味では極めて常識的な結果である。しかし、集団ないし組織体としての大学の構造的特質の一つも看取できよう。問題はむしろどのような諸要因によってこのような結果がでてくるかということである。近代化社会および／における集団や個人にとって意味をもつものは、パーソンズのパターン・ヴァリアブルによるならば、Achievement と Universalism である。この Achievement と Universalism が大学と大学教授のリクルートメントに厳格に浸透しているならば、マクロのかつ長期的にみてわが国の大学の学問水準に好結果をもたらすだろう。scientific productivity of scientist や quality of scientific research が大学や大学教授への報償としてリクルートメント数に割り当てられているならば問題は少ない。それには、全大学と全大学教授ないしそれらのサンプルの学問的生産性と学問的研究の質とを収集し、分析する必要がある。それをするこゝとなしに、単に統計的数字に基づいて特定大学からのリクルートメント数の偏在を指摘することは誤りである。しかし、コールらのいうような研究の質のインデックスとして引用回数进行分析する方法^⑤——citation counts とか citation analysis とか呼ばれる——を使用したとしても、学問的生産性が

大学や学者の地位に影響を及ぼすのか、あるいは大学や学者の地位が学問的生産性に影響を及ぼすのか、あるいはまた両者の相乗的にかかわりなのかという問題も残る。リクルートメントという点からみれば、個人のいわゆる業績が大学での最初の任命を左右するのか、あるいは個人の出身大学が最初の任命に影響するののかという問題がある。学問的生産性の問題とリクルートメントの問題とは、本来次元を異にしているが、現実には生産性とリクルートメントとの間には学閥や情実^⑭といった媒介項が入ってくるだろう。学界において、あるいは大学においてある特定大学出身の教授の割合が高いという理由のみで学閥の存在を確認したことにはならない。また、逆に学閥の存在を否定するわけにはいかない。より厳密には母集団の数を考慮に入れ、学問的生産性や研究の質が上首尾に測定され得た後に、なおかつ特定大学出身の割合が期待値よりも高ければ学閥や情実の存在を学界の中に認めることができる。

一口に大学教授のリクルートメントといっても右でみたようなさまざまな問題とかかわっている。この小論においては、統計的数字の上のことだけしか扱うことができなかったが今後はリクルートメントのプロセスの内容に立入った分析の必要があろう。ウェーバーが『職業としての学問』の中でいう学問ないし学者の外面的条件や学者のパソナリティをわが国の現実に即して、社会学的に考察する必要がある。

註

- ⑬ コール・コールは、論文の質ないし学問的意義を他の学者による引用回数で測定している。(Cole, Jonathan R. & Cole, Stephen, 1973, *Social Stratification in*

- Science, The University of Chicago Press, pp. 21-36.* ⑭ 拙稿「一九七九「閥について(その一)」『佛大社会学』第四号、佛教大学社会学研究会。